吾人の道往觀

樂天子

一、交際に就て

交際は處世上欠くべからざる個人若くは一家相互の關係であつて、もし交際の道なくんば、世上はまことに無味乾燥である、交際あつて始めて幾多の趣味を生じ社會の利益を見らるゝのである、上古人類の少き時に當りては、蓋し交際なるものはなかつたのである、然るに人類漸く繁殖し、分業行はれてより茲に始めて各人の交際を結ぶに至り幾個の家族分立して又始めて一家の交際をなす樣になつた、交際は單に人生の趣味快樂を與ふるに止まらず、又幾多の稗益を與へ、己を喜ばしめ、同時に人を喜ばしめ、亦自家をも益し、同時に他家をも益するので、社會は之を以て活動し、國家は之を以て進歩發達するのである、今交際なるものゝ範圍を類別して左に之を述べん。

一、親族間の交際、親族とは我が現行民法第七百二十五條には(一)六親等内の血族、(二)配偶者、(三)三親等内の姻族を以て親族とすべき規定である、然れども余が茲に親族と稱するは、從來の習慣及び地方の慣例によりて、普通に親族と云ふものをいふのである、其一家相互の家族間に於ての交際をなすは、今更説明するの必要はない。

二、知人間の交際、知人とは朋友師弟は勿論雇主と被雇主の相互間に於ける、或は有職者の長上者、同僚下僚相互間に於ける等其範圍は頗ふる多くある。

三、近隣間の交際、近隣とは地方の慣例により、或は多少の差異あるべしと雖も、俗に所謂向ふ三軒兩隣の義にして別に意味のある譯ではない。凡そ交際の仕方は其相互關係の厚薄深淺及距離の遠近、身分の上下責賤等によりて異同がある。故に以上三種を通じて均一にすべからざるは勿論其一種間にありても亦異同なき能はず、然れば人は先づ其家の身代其人の身分の如何及び相手方との關係の度を斟酌して、之に處せざればならぬ、約言すれば、其分限相應の交際をなすべきが必要で

ある。何となれば交際なるものは、寒暑贈答の往復に止まらず、年内二季の贈品は勿論、出産又は婚姻、吊祭には夫々物品金錢の贈與あり、又集會等に要する、飲食費の如きに至ては、其額は隨分莫大の費用を支出し、一家經濟上至難の境遇に立つなき能はざるが故に交際の程度を定め置くの必要があるのである、而して其の程度なるものは、到底劃然と定ることを得ずと雖も大略左の標準に依らば左程の相違はなからうと思ふ。

第一、普通の關係なる個人又は一家の間に於ては其の貧富貴賤に抱はらず自己又は自家と同一の地位にある世間の他の物と比較して、同樣の取扱をなすこと。

第二、自己又は自家が恩惠を受けたる、若しくは受けつゝある人、又は其家に對しては、第一に比し相當の割增を要すること。

第三、近親は遠親より重くすること。

第四、概して親族間は知人間より重くすること。

第五、近隣は親族に亞くこと。

要するに以上の標は準概則たるに過ぎず、何となれば、知人にして其の關係遠く近親に勝るものあり、近隣にして其情狀或は親族の右に出づる者もあり、富貴の人必ずしも交際の廣きものにあらず貧賤の人亦必ずしも交際の狹きものにあらず、然れば是等一切の事情につき其本末輕重を計り、其宜しきに從ふは自然の大法である。

二、道德と禮式

道德學といひ、宗教といひ禮式といひ、その論ずる所、說明するところは、各々異なれりと雖も、皆人道を說明するの一端に過ぎぬのである。禮式とは東洋に最も多く、西洋には少く其源は支那聖人の道に紀元を起し、今日まで遺傳せらるゝのである、道德學とか宗教學とか三ふものは、西洋にも東洋にもあれども、重もに此の名稱の下に人心の改良維持を謀るは、殊に西洋諸國に於て盛に行はるゝのである、彼の孔孟の禮式を重んじて之を人民の風俗となしたる精神は、普通人民の皆一樣に倫理の奧義を達し、人道を尊奉するとは、至りて至難の事である、只これは聖者賢人のみに能く行ひ得らるゝばかりである、普通人民には、此の

如く至難の事を教ふるよりも、先づ斯々の事をなすは禮にあらずとして、器械的に之も禮にあらず彼も禮にあらず、禮を欠きたるものは人にあらずと、恰も政府の法律命令の如くに人をして之を守らしめたのである、西洋の倫理學なるものは、之に相反して、何故に男女席を同ふするときは眞正の行爲を誤るか、何故に父母を敬せざるべからざるか、何故に夫婦の大倫は破るべからざるか、斯々の理由ある故に父母を愛せざるべからず、朋友に信義なかるべからず、男女席を異にせざるべからずと、其道理を詳細に說明して教ふるのである、要するに西洋に於ては其道理を教へて道に從はしむる禮式である、東洋は禮式なるものを器械的に注入して道に從はしむるのである、故に兩者其方法を異にすると雖も、其精神に至りては、少しも相違するをはない、一は以て內部より教へ一は以て外部より之を教ふるのみである、夫故に支那及び本邦の禮式を廢するにも及ばず、西洋の倫理學を輕視するにも及ばない、要するに兩者を宜しく應用して、人倫道德の道に達せしめねばならぬ

俳句雜

朝寒に鍋の墨かく女かな　鹽野奇零
霜の夜や方丈更けて灯のもゝ　清
初霜の日にしむ竹の雫かな　仝
冬の月水も光りて流れけり　仝
杖立て茶の實を拾ふ小春かな　樂
山茶花や壁に日當る外厠　仝
袴着や武家の風もすたれぬる　秋窓
小春日の湖は晴たり滋賀の里　仝
日のあたる二階の窓や吊し柿　露月
御祝儀に雀おどりや一茶の日　仝
古塚の落葉の上に落葉かな　吉番
軍談を聞くに嬉しき炬燵かな　仝
城跡や梅檀もありて冬木立　素泉
身の上を易者に聞きて夜寒かな　仝
行燈のくらき小言や今年酒　き子
厂渡る頃を朝寒夜寒かな　仝
朝寒や人に物言ふ壁どなり　葉郎
朝寒や懷手して椽の先　仝
行秋や取りのこされて柿一つ　奇
屋根高き野中の寺や星月夜　仝
寄席を出てそば屋に遣入る霜夜かな　仝